

## *Vimalakīrtinirdeśa* の yamakapuṭa 構造

— Advayadharmamukhapraveśaparivarta 「入不二法門品」を中心に —

梅田愛子

仏教学こころの研究所

第9回中日仏教学会議（人民大学）にて発表

この論文は、2021 年の仏教思想学会で発表し、2022 年に同学会誌に掲載された論文の一部を基に、一部加筆・修正したものである。2022 年に提出された博士論文（2023 年公開）には、yamakapuṭa 構造のより詳細で全体的な分析が含まれている。

### 0. 序論

『維摩経』は数ある大乘経典の中で形式・内容ともに極めてユニークな経典である。『法華経』のような散文と長文を繰り返すスートラ形式ではなく、たった一日の出来事を三幕十二場（または十四場）から成るドラマ仕立てのような戯曲的形式によって、般若経では冗長になりがちな空思想を奥行きをもって語り進めることに成功しているとされる<sup>1</sup>。しかし、実際どのような表現や構造的特徴を持っていることが上記のような評価に繋がっているのか、この妥当性や根拠を詳細に論じた研究は今までに無い。そこで本発表では、梵文『維摩経』（*Vimalakīrtinirdeśa*, 以下 Vkn）が自身の法門を“yamaka（双・対）の重なり（puṭa）と vyatyasta（逆倒・逆説）の完遂（nirhāra）<sup>2</sup>”を具えた経典であると宣言していることに着目し、Vkn が特に前者 yamaka の「入れ子構造」になっていることを解明することによって、本経の構造的な特徴や機能を明らかにしたい。今回は時間の都合上、Advayadharmamukhapraveśaparivarta 「入不二法門品」を中心に考察する。

### 1. 研究方法

「入不二法門品」（梵文写本とチベット語訳は第8章、漢訳は第9章）は『維摩経』の代表的な教説の一つであり、これを思想的に分析したものは多い<sup>3</sup>が、yamaka 形式や yamakapuṭa という構造的な視点からこれを考察するものはない。Advaya とは反射的に

<sup>1</sup> 上田昇「10. 空・中観部」勝崎・小峰・下田・渡辺編[1997:288 下]

<sup>2</sup> (XII, §23) ...*imaṃ dharmaparyāyaṃ vimalakīrtinirdeśaṃ yamakaputavyatyastanirhāraṃ acintyadharma-vimokṣaparivartam ity api...* 底本で nirhāra とあるが、おそらく nirhāra か nirhāra の誤り。関連箇所では、(IV, §1)...*vyastasaṃstāvānanirhāra...*とあるので、これに従い r を補う。ちなみに、この波線箇所に対応する漢訳は欠。代わりに、玄奘訳のみ「自在神変」という文言が足されている。チベット語訳は *phrugs su sbyar ba snrel zhir mngon par bsgrubs pa* “対句の結びつきと逆倒の完成”（長尾訳 p.189）となっている。ちなみに、Gomez&Harrison[2022]の note296 でも、この別題の詳細な議論がなされている。

<sup>3</sup> 日本では代表的なものに、兒山[1958][1964]、橋本[1966]、大鹿[1988]、西野[2013]。

dvaya を連想させ、これは語彙定義に従えば yamaka の一形態を構成するため、advaya と yamaka の関係を容易に認識できる。ここで注意すべきは、dvaya と yamaka を混同してはならないことである。Dvaya は言語的概念であり、yamaka は修辭的技法である。Vkn において、この yamaka がこの advaya の教説の構造とどのように関係しているかを分析する。更に、他の仏教經典における yamaka や advaya の使用についても調査し、Vkn のそれと比較検討する。

## 2. yamaka の概観

既述のように、yamaka は『維摩經』の特色を捉える上で、重要なキーワードでありシンボルである。まず、yamaka-の語義を確認する。MWによると“twin, doubled, two-fold”と最初にある。BHSD でも“pair, paired”という訳語を最初に挙げ、Mvy の 798 から“yamaka-vyatyastāhāra-kuśalāḥ”という複合語を例に出して、“clever in the technique of the pair and the inverted”と訳している。また、PTS の辞書によると、パーリ語でも yamaka-は“double, twin”とあり、ヴェーダ語の yama-を語源とし、yama-も“twin, pair”の語義がある。この文脈での yama-という言葉は、所謂、冥界の神として知られる Yama と関連があり、より古い伝承では、はじめ彼は Yamī という女子と双子であった。他には、MW に“(in rhet.) the repetition in the same stanza of words or syllables similar in sound but different in meaning, paronomasia (of which various kinds are enumerated)”という修辭学上の定義もあるが、これは、後にインド古典文学において修辭法 (alaṅkāra) の一つに挙げられるもので【押韻】と訳され、音韻による修辭法 (śabdālaṅkāra) の一種である。この場合の yamaka (押韻) とは、異なる意味の言葉を同じ文字で表し、韻を踏ませる技法である<sup>4</sup>。

初期仏教における yamaka を見ると、『法句經』(Dhammapada) の例が挙げられる。その第 1 章は「双品」(yamakavagga) と呼ばれ、類似した語彙だが対照的な意味を持つ二つの詩を対にして、修行者が避けるべき道と取るべき道を対比させる形式を指している。例えば、以下は詩の対であり、両者とも śloka-pathyā 韻律で構成されているが、波線部分を除いて全く同じ文句を使用し、波線箇所の語も意味は逆だが、類似した音韻的性質と全く同じ韻律リズムを持っている。

manopubbaṅgamā dhammā manoseṭṭhā manomayā /	u--- u---  u--- u-u-
manasā ce <u>padutthena</u> bhāsati vā karoti vā /	uu-- u---u  -u-- u-u-
tato nam dukkham <sup>5</sup> anveti <u>cakkam</u> va <u>vahato padam</u> //	u--u u--u  --uu u-u-

物事は、心を先とし、心を主人とし、心によって作られる。

もしも汚れた心で話し、何かをなすならば、

苦しみはその人につき従う。車を牽く〔牛〕の足跡に車輪がついて行くように。と。

(松村訳 p.7)

<sup>4</sup> 浅井[1996:80] , GEROW[1971:223-225]

<sup>5</sup> この u 母音は-kkh-という破裂音の前で単母音扱い。

manopubbaṅgamā dhammā manoseṭṭhā manomayā /      〰――|〰――||〰――|〰――||  
 manasā ce pasannena bhāsati vā karoti vā /      〰――|〰――||――|〰――||  
 tato nam sukham anveti chāyā va anapāyini //      〰――|〰――||――|〰――||

物事は、心を先とし、心を主人とし、心によって作られる。

もし、淨らかな心で話したり、何かをなすならば、

樂はその人につき従う、影が離れないように。と。(松村訳 p.42)

このように、対照的な意味を持つ記憶しやすい対句を使用し、詩節全体で一貫したリズムを維持することで、この技法は修行者が教えを記憶し暗唱することを容易にした。

また、パーリ・アビダンマ七論の第六番目の論書に『双論』(Yamaka)があり、この文献は mūla (根), khanda (蘊), āyatana ([十二] 処), dhātu (界), sacca (諦), saṅkhāra (行), anusaya (随眠), citta (心), dhamma (法), indriya (根) の 10 章からなり、これら仏教の教えに特定のテーマをそれぞれ正負に一対ずつ重ねて説く形式から yamaka という。その内容を見ると、「もし<善なるもの>であるならば、これは悉く<善なる根>であるのか？あるいはまた、もし<善なる根>であるならば、これは悉く<善なるもの>であるのか？<sup>6</sup>」また「もし<不善なるもの>であるならば、これは悉く<不善なる根>であるのか？あるいはまた、もし<不善なる根>であるならば、これは悉く<不善なるもの>であるのか？<sup>7</sup>」といったように、仮定演繹的な問答によって、特定のテーマを様々な角度から論議するものである。それは多量で、ともすると退屈な繰り返しであるが、真摯な修行者にとっては、アビダンマ教義をそのように体系的に整理し反復することは、日々の瞑想的洞察において、一抹の混乱もなく心が明瞭になることを手助けするものである。

以上のように、初期仏教の yamaka は修行者としての心得を記憶・暗唱するための手段であり、教義を整理し理解させる方法に関わるものである。

### 3. advaya の概観

まずニカーヤ經典や般若經等に見られる advaya の用法を確認する。Saṅgīti Sutta (「合誦經」DN 33), Dasuttara Sutta (「十増經」DN 34), Mahāsakuludāyī Sutta (「大サクルダーイン經」MN 77), Cūḷa Suññata Sutta 「小空性經」(MN 121), Paṭhama Kosala Sutta (「第一のコーサラ經」AN 10:29) には十遍処の修習が説かれるのだが、その方法は<地・水・火・風・青・赤・白・空・識の十遍を順番に、上に下に四方に均等に (advayaṃ) 無量に想念する>というものである<sup>8</sup>。ここでは、advaya-は Acc.形からの Adv.としての用法である。先行訳では「專一に」とか「全体に」とかあるが、例えば地遍の瞑想は初めから「專一に」

<sup>6</sup> Ye keci kusalā dhammā, sabbe te kusalamūlā? Ye vā pana kusalamūlā, sabbe te dhammā kusalā? (Rhys-Davids: 1<sup>1-2</sup>)

<sup>7</sup> Ye keci akusalā dhammā, sabbe te akusalamūlā? Ye vā pana akusalamūlā, sabbe te dhammā akusalā? (Rhys-Davids: 2<sup>11-12</sup>)

<sup>8</sup> dasa kaṣiṇāyatanāni: paṭhavikaṣiṇameko sañjānāti uddhaṃ adho tiriyaṃ advayaṃ appamāṇaṃ ... viññāṇakaṣiṇameko sañjānāti uddhaṃ adho tiriyaṃ advayaṃ appamāṇaṃ. (DN33)

想念することが前提であるし、地遍の原語は *paṭhavikasīṇa-*だが、*kasīṇa-*という語自体に“entire”の意味があり、上に下に四方に想念している時点で「全体に」想念しているので、ここでの *advaya-*は、*sama-*と近い意味合いで「均等に」くらいが適当に思える。また、*advaya*と関連するもので *Dvaya Sutta* (「双経」SN 35:93)があるが、これは感官と対境が二束の葦が両者相依って立つことに喩えられる<sup>9</sup>ように、両者が相依ってのみ意識が生起する縁起を説くものである。そこから、縁起する(現象)世界が迷いの世界であるならば、縁起を超越することが解脱であり、それが *advaya* であるという表現に行き着くのは想像に難くない。

『八千頌般若』(以下、ASP)では<sup>10</sup>、例えば第1章で、色・受・想・行・識の五蘊が不生・不滅と不二(*advaya*)であると説かれる<sup>11</sup>。第2章でも、有情に始まり、預流・一來・不還・阿羅漢から正等覺や涅槃まで、それぞれ夢・幻と不二(*advaya*)であり、分けることのできないものとされる<sup>12</sup>。すなわち、第1章では、五蘊はそれとして実在するものではなく、仮に名付けられたもので、独立せず他と切り離せない不二(*advaya*)なるものであり、本質的には不生・不滅であるから、まさに不生・不滅ということと不二(*advaya*)であるという。そして第2章では、有情も涅槃も言葉として分別されているが、本質的にはそのように実在するわけではないので、まさに有情や涅槃(といった言葉や言語理解)は、夢・幻と切り離せない不二(*advaya*)であるという。これらは、ASPでの“もとより、すべてのものはよりどころがない(から)”<sup>13</sup>という一つの真理を表現したものであり、*advaya* はすべての事物とその諸行無常で絶えず変化する性質との橋渡しとして使用されている。

第7章では、*advaya* は空性(*sūnyatva*)と離性(*vivaktatva*)という性質と関連づけて説かれる<sup>14</sup>。更に第12章では、*advaya* の性質(*advayatva*)として、切り離せないという性質(*advaidhikāratva*)の他に、一でもなく(*anekatva*)、多でもなく(*anānātva*)、尽きることもなく(*akṣayatva*)、変化することもない性質(*avikāratva*)が同列に挙げられている<sup>15</sup>。ま

<sup>9</sup> Nakalāpi Sutta (「葦束経」SN 12:67)

<sup>10</sup> ここで一々の例文は挙げないが、ASPでは *advaya-*の語が第1章、第2章、第7章、第8章、第9章、第16章、第17章、第28章に見られる。

<sup>11</sup> *tatkasya hetoḥ? tathā hi yo rūpasyanutpādo na tadrūpam / yo rūpasyāvyayo na tadrūpam / ityanutpādaś ca rūpaṃ ca advayametadadvaidhikāram / ityavyayaś ca rūpaṃ ca advayametadadvaidhikāram / yatpunaretaducyate rūpamiti, advayasyaishā gaṇanā kṛtā / evaṃ tathā hi yo vedanāyāḥ saṃjñāyāḥ saṃskārāṇām / tathā hi yo vijñānasyānutpādo na tadvijñānam, yo vijñānasyāvyayo na tadvijñānam / ityanutpādaś ca vijñānaṃ ca advayametadadvaidhikāram / ityavyayaś ca vijñānaḥ ca advayametadadvaidhikāram / yatpunaretaducyate vijñānamiti, advayasyaishā gaṇanā kṛtā* (Vaidya: 14<sup>2-7</sup>)

<sup>12</sup> *iti hi māyā ca sattvās ca advayametadadvaidhikāram, iti hi svapnaś ca sattvās ca advayametadadvaidhikāram / ... iti hi devaputrā māyā ca nirvāṇaṃ ca advayametadadvaidhikāram / iti hi svapnaś ca nirvāṇaṃ ca advayametadadvaidhikāram //* (Vaidya:20<sup>25</sup>)

<sup>13</sup> *yathāpi nāma anīśritattvātsarvadharmāṇām* (Vaidya:15<sup>25</sup>)

<sup>14</sup> *iti hi prajñāpāramitā ca skandhadhātvyatanam ca advayametadadvaidhikāram sūnyatvādviviktatvāt* (Vaidya:89<sup>16</sup>)「そういうわけで、知恵の完成と群、種、領域というこれは空であり、離脱しているために、不二であり、分けることのできないものなのである。」(梶山訳 p.214)

<sup>15</sup> *anekatvādanānātvādakṣayatvādvikāratvādvayatvādvaidhikāratvāt* / (Vaidya: 134<sup>25</sup>)

た、advaya の語ではないが、antadvaya（二極）の否定表現も見受けられる。第9章では、<二極に従わないことの完成 (antadvayānanugamapāramitā)> が完全な無執着によって達成されると説かれ、第28章では、般若波羅蜜について、二極の排除 (antadvayavivarjita) と〔十二〕縁起の観察が関連づけて説かれる。

後代では、『二万五千頌般若』（以下、PSP）の第72章に、仮構されたが故に、例えば色形 (rūpa) は、色形でもなく色形でないもの (arūpa) でもなく、また色形でも色形でないものでもないものは不二のもの (advaya) と定義される。それゆえ世尊によって、仮構された色形は不二のものであるとみなされたことが説かれる<sup>16</sup>。ここでの不二は空の別語のように表現される。また、MSA-bh の第6章では、不二の意味 (advayārtha) が勝義である<sup>17</sup>として、その特徴を以下のように、五種の advaya に纏めている。

- (1) 有でなく、非有でない (na san na cāsan)
- (2) その様でなく、別様でもない (na tathā na cānyathā)
- (3) 生じなく、滅しない (na jāyate vyeti na)
- (4) 減るのでもなく、増えるのでもない (cāvahīyate na vardhate)
- (5) 清浄にならずして、しかも清浄になる (nāpi viśudhyate punar viśudhyate)

以上のように、最初は advaya も特別な語ではなかったが、大乘仏教になると「A と絶えず変化する性質は advaya (切り離せないもの) である」という表現から、徐々に「A であり non-A であるものは advaya なものである」と空[性] (śūnya-tā) の別語のように術語化され、整理されていったのが分かる。

#### 4. 「入不二法門品」における advaya と yamakaṣaṭṭha 構造

周知の通り「入不二法門品」は『維摩経』の教説のハイライトの一つであり、『維摩経』は advaya (不二) に着目し、これをフィーチャリングした最初の経典といって良い。これまでも『維摩経』における advaya の意義や定義に関する研究<sup>18</sup>は多く見られるが、それ

---

<sup>16</sup> yat parikalpitam rūpam tan na rūpam nārūpam yat punā rūpam nārūpam tad advayam, idam ca samdhāyoktam mayā advayasaiṣā gaṇanā kṛtā yad idam rūpam iti. (Kimura: 153<sup>22-25</sup>)

<sup>17</sup> advayārtho hi paramārthaḥ (Levi:22<sup>14</sup>)

<sup>18</sup> 大鹿[1988:361]は、「入不二法門」以外の他の章で【不二】がどのように用いられるか調査し、『維摩経』における【不二】の定義を以下の三つに纏めている。

- A) 相対する二者の無差別平等
- B) 相対する二の何れでもないこと (四句分別の俱非)
- C) 唯一絶対

更に西野[2013:198-199]はこの三定義を踏まえつつ、王[2006:153-155]の(1)単遣法、(2)双遣法、(3)不取不捨法と合わせて、次のように「入不二法門」の31人の菩薩たちの説法を分類している。

- A) 単遣法 (相対する二者の無差別平等): A が消えれば、non-A も消える (11 菩薩)
- B) 双遣法 (相対する二の何れでもない): 空・無相に照らして A も non-A もない (11 菩薩)

だけでは何故、この教説が本經のハイライトになり得たかを理解するには不十分である。例えば、般若經では「A は non-A によって A である<sup>19)</sup>」「A は non-A である<sup>20)</sup>」という構文が代表的である。これは、概念 (A) とそれによって否定される概念 (non-A) を結びつける (A = non-A) 革新的な表現だが、これは“「A」というものについての既成の概念をいったん破壊することであり、世俗の言語習慣 (vyavahāra) を否定する空の思想の眼目といえる<sup>21)</sup>。”このような革新的な要素が「入不二法門品」のどこに見出されるのか。同時に、般若經では「A と B は advaya である」「A と non-A は advaya である」という表現が確認できたが、これと「入不二法門品」における advaya の構文がどう違うのか。以上を yamaka 形式やその重なり (puṭa) という構造的な面から考察する。

まず「入不二法門品」では、advaya のみならず、下記のように①dvaya (二) と②advaya (不二) と③advayapraveśa (入不二) という3段階で説かれる。

(VIII, § 1) utpādabhaṅgau kulaputra dvayam / yan na jātaṃ notpannam na tasya kaścid bhaṅgaḥ / anutpādadharmakṣāntipratilambho 'dvayapraveśaḥ /  
善男子よ、①生と滅とが二なるものである (相対的なものである)。②生まれたのでもなく生ずることもないもの、それには何の滅もない。③無生法忍を獲得することが、不二に入ることである。

(VIII, § 2) ahaṃ mameti dvayam etat / ātmāsamāropān mameti na bhavati / yaś cāsamāropo 'yam advayapraveśaḥ /  
①「私が (我)、私のものが (我所)」という、それが二なるものである (相対的なものである)。②我を仮構することがなければ、私のもの (我所) ということも起きない。だから、③「我を」仮構しないこと、これが不二に入ることである。

---

C) 唯一絶対：真如、実相に照らして A と non-A を超越 (A 即 non-A) (9 菩薩)  
ただし筆者は「C) 唯一絶対」の立場には賛成できない。LAMOTTE[1962:46-47]にも“Mais cette non-dualité consistant en une commune inexistence n'implique aucune sorte de monisme. (空であり非存在であって、一切法は平等である。不二があるというのはこの意味においてである。しかし、ある共通の非存在から成るこの不二は、いかなる種類の一元論をも意味しない)”とある。  
【不二】を【一】に還元してしまうと、そこで概念化・固定化され【不二】の作用が台無しになってしまうからである。

<sup>19)</sup> 例えば、ASP における以下の例文：

sthito 'vinivartaniyāyāṃ bodhisattvabhūmau, susthito 'sthānayogena / (Vaidya: 4<sup>25)</sup>  
退転することのない菩薩の階位にとどまり、とどまらないという方法で、よくそこにとどまっている。

apī tu sthāsyati sarvajñatāyāṃ asthānayogena / (Vaidya: 11<sup>10)</sup>

けれども、とどまらないという方法で、全知者性にとどまる。

<sup>20)</sup> 例えば、鈴木大拙が「即非の論理」を見出した『金剛般若』の第 13 節にも以下のようにある。

yaiva Subhūte prajñāpāramitā Tathāgatena bhāṣitā saiva-a-pāramitā / (Conze: 37<sup>25</sup>-38<sup>1)</sup>)

スプーティよ、世尊によって説かれた般若波羅蜜こそ、まさしく非波羅蜜なのだ。

<sup>21)</sup> 渡辺[2013a:7]

(VIII, § 3) saṃkleśo vyavadānam iti dvayam etat / saṃkleśaparijñānād vyavadānamanāna bhavati / sarvamananāsamudghātā sārūpyagāmini pratipad ayam advayapraveśaḥ /

①「雑染，清浄」という，それが二なるものである（相対的なものである）．②雑染を知り尽くすことにより，清浄を思考することは存在しない．③あらゆる思考を断じた，[染・浄の] 相似性に至る道，これが不二に入ることである．

「入不二法門品」は，ヴィマラキールティによって“不二の法門に入るとは如何なることか”という問いが発せられることに始まり，先ず 31 人の菩薩が各々応答するのだが，下記の表に表したように，①で規定される dvaya の内容は必ずしも二項ではない．それにも拘らず①でわざわざ dvaya と規定しているのは，修辞形式としての yamaka を意識しているからである．

菩薩名	dvaya (二) の内容
1. ダルマヴィクルヴァナ (法自在菩薩)	生・滅
2. シュリーグプタ (徳守菩薩)	私・我所
3. シュリークータ (徳頂菩薩)	雑染・清浄
4. スナクシャトラ (善宿菩薩)	心の揺れ・思考
5. スバーフ (妙臂菩薩)	菩薩の心・声聞の心
6. アニミシャ (不昬菩薩)	取ること・取らないこと
7. スネートラ (善眼菩薩)	一相・無相
8. プシュヤ (弗沙菩薩)	善・不善
9. シンハ (獅子菩薩)	過失・過失のないこと
10. シンハマティ (獅子意菩薩)	有漏・無漏
11. スッカーディムクタ (浄解菩薩)	安楽である・安楽でない
12. ナーラーヤナ (那羅延菩薩)	世間・出世間
13. ダーントマティ (善意菩薩)	輪廻・涅槃
14. プラティアクシャダルシン (現見菩薩)	尽・不尽
15. サマンタグプタ (普守菩薩)	我・無我
16. ヴイドゥユットデーヴァ (電天菩薩)	明・無明
17. プリヤダルシャナ (喜見菩薩)	色・空
18. プラバーケートゥ (明相菩薩)	四界・虚空界
19. スマティ (妙意菩薩)	眼 (六根)・色 (六処)
20. アクシャヤマティ (無尽意菩薩)	六波羅蜜・一切智
21. ガンビーラブッディ (深慧菩薩)	空・無相・無願 (三解脱門)
22. シャーンテンドリヤ (寂根菩薩)	仏・法・僧伽 (三宝)
23. アパラティハタチャクシュ (心無閼菩薩)	有身・有身の滅
24. スヴィニータ (上善菩薩)	身・口・意
25. プンヤクシェートウラ (福田菩薩)	福・非福・不動
26. パドマヴューハ (華嚴菩薩)	主・客

27. シュリーガルバ（徳蔵菩薩）	知覚によって顕示されること
28. チャンドローッタラ（月上菩薩）	闇・明
29. ラトナムドゥラーハスタ（宝印手菩薩）	涅槃の喜び・輪廻を喜ばない
30. マニクータラージャ（珠頂王菩薩）	正道・邪道
31. サトゥヤナンディン（樂実菩薩）	真実・虚妄

しかも、表中、二項で現れない 21, 22, 24, 25, 27 を精査してみると、そこで項目に挙げられたものを識別することを dvaya と規定している。この dvaya とは物事の相対化、すなわち識別作用のはじまりを示し、例えその識別の対象が traya であろうが catuṣṭaya であろうが、dvaya に集約されているのである。そして、その否定超越が advaya である。この advaya への自覚は、そのまま実践に現れることであって、実践している者の境界には実はその自覚さえ起こらない。踏み込んで言うならば【不二】即【入不二】である。（ちなみに、これは『維摩経』自体が主張していることでもある。すなわち「入不二法門品」の中で言われるように、正道に住する者には正道であるとの思いもなく<sup>22</sup>、真実を見る者には真実にさえ見ることがない<sup>23</sup>のある。）以上を踏まえつつ、①dvaya（二）②advaya（不二）③advayapraveśa（入不二）という3段階を構文化してみる。

- ① A と B（などに代表される識別作用）を dvaya として規定する。
- ② その dvaya が否定（advaya）される。
- ③ ②の獲得＝advayapraveśa である。

すなわち、①で相対概念である dvaya が挙げられ（一つ目の yamaka）、②でそれが否定される（dvaya と advaya、二つ目の yamaka）。③では②の否定命題 advaya が真であるならば、即その実践（advayapraveśa）へと等値される（否定命題と肯定命題、三つ目の yamaka）。このように、advaya の教説は言語的・修辭的表現として yamaka の性質を持つだけでなく、教説の構造も yamaka の重なり（puṭa）によって成り立っている。

更に「入不二法門品」の構造を俯瞰して観察すると、①31 人の菩薩たちが様々な dvaya について入不二法門を説き、②マञ्ジュシュリーが彼らを総括する意味で、一切法について如何なる言語表現も不可能であることを他ならぬ言語で説き、③ヴィマラキールティがそれを体現してみせた、という3段階を取っている。これも①多くの教説と②一つの教説のコントラスト、②有言（言葉）と③無言（実践）のコントラスト<sup>24</sup>による二重の yamaka である。

以上のように、「入不二法門品」には様々な yamaka が組み込まれているのだが、ここで

<sup>22</sup> (VIII, § 30)...mārgapratipannasya na kumārgaḥ samudācarati / asamudācārasthitasya na mārgasaṃjñā bhavati na kumārgasaṃjñā

<sup>23</sup> (VIII, § 31)...satyadarśi satyam eva na samanupaśyati, kuto mṛṣā drakṣyati

<sup>24</sup> これら①②③は「三階説」や「三階論」と呼ばれるものだが、支謙訳に③に対応する箇所はない。そうすると三階説は成り立たなくなるのだが、yamaka の重なりとして考えれば一重か二重かの違いなので、本経の発展上の経過と考えれば納得がいく。



注目すべきことがある。それは、31 人の菩薩によって規定された dvaya の内容が、大乘仏教の教えについて特定のテーマであることである。パーリ經典の yamaka も、時の仏教に特定のテーマが一對ずつ説かれる手法であったが、ここで yamaka という手法が使用されるのもそれと繋がりをもって理解されるべきである。

## 5. 結論

「A=non-A」という表現は、般若波羅蜜を宣揚する般若經による既成概念の破壊であり、世俗の言語習慣の否定であった。そして空・縁起・無自性といった否定思想も整理されてゆく<sup>25</sup>のだが、その潮流を組む『維摩經』は「入不二法門品」で、般若經では「A=non-A」とある種、非常識で驚愕的な表現の繰り返しによって、難解であっただろう空性思想を大乘仏教の教えに特定のテーマに沿って、段階を踏んで説き、一連の流れの中で最終的にその実践まで促す。その手段として、元々、教理の暗唱や整理の方法として使用されていた、仏教徒にとって馴染みのある yamaka を応用した<sup>26</sup>。そして、従来のように単に「A と B は advaya である」という平面的な表現ではなく、yamaka を言語表現や構造にまで多重 (puṭa) に組み込むことにより、advaya という教説に体系的な奥行きを与えたのだ。

---

<sup>25</sup> 渡辺章悟「1. 般若部」勝崎・小峰・下田・渡辺編[1997:56 上]によると、縁起説から〈和合生〉が説かれ、更に仮和合生のために〈自性がなく〉〈空〉であるという「縁起→和合生→無自性→空」という展開を論理的基礎づけとしてみれば、このような順になるが、歴史的展開の視点から考察すると、最初にあらゆるものの固定的な概念構造を打ち破るために不可説・不生・遠離等が説かれ、これが次第に空（性）という術語に確定される。そしてその根拠を無自性に求め、さらに無自性の理由概念として縁起和合生を指摘するようになった（「空→無自性→和合生→縁起」）とある。

<sup>26</sup> 『維摩經』と関連の深い『迦葉品』では第 1 章で菩薩の正しいあり方と誤ったあり方とが、それぞれ八種ずつ分類して述べられる。これはアビダンマの yamaka により近い、大乘の yamaka と呼べるような形態をしている。『維摩經』はこれを更に発展応用させたものと言える。

<凡例・略号>

- 『維摩經』＝ 狭義には、鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』を指すが、本論では広義の意味での『維摩經』一般を指すこととする。
- 本稿では校訂本『梵文維摩經—ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂—』（大正大学総合佛教研究所 梵語仏典研究会，大正大学出版会，2006 年）を底本とする。
- 訳語について、断りのない限り、拙訳である。
- 高橋・西野訳＝高橋尚夫・西野翠『梵文和訳 維摩經』，春秋社，2011 年
- 長尾訳＝長尾雅人「維摩經」長尾雅人・丹治昭義『維摩經・首楞嚴三昧經』大乘仏典 7，中央公論新社，2002 年
- 梶山訳＝梶山雄一『大乘仏典 2 八千頌般若經 I』，中央公論新社，2001 年
- 松村訳＝松村淳子『真理のことばお物語集—ダンマパダ・アッタヴァンナナー』第一巻，国書刊行会，2021 年
- DN = Dīgha Nikāya
- MN = Majjhima Nikāya
- AN = Aṅguttara Nikāya
- ASP = Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā
- PSP = Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā
- Mvy = Mahāvvyutpatti
- MSA-bh = Asaṅga: Mahāyānasūtrāḷḡkāra with Vasubandhu's commentary (Bhāṣya)
- PTS = The Pāli Text Society
- BHSD = *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*, EDGERTON F., New Haven, 1953
- MW = *A Sanskrit-English Dictionary*, MONIER-WILLIAMS M., Oxford, 1899
- Acc. = Accusative (形容詞)
- Adv. = Adverb (副詞)

【参考文献一覧】

<一次文献>

大正大学総合佛教研究所 梵語佛典研究会編

[2006] : 『梵文維摩經—ポタラ宮所蔵写本に基づく校訂—』，大正大学出版会  
ed. Conze, Edward

[1974] : *Vajracchedikā Prajñāpāramitā*, ROMA Is. M.E.O.  
ed. Kern, H. and Nanjo, B. (KN)

[1912] : *Saddharmapuṇḍarīkasūtra*, *Bibliotheca Buddhica X*, Saint-Petersbourg  
ed. Kimura, Takayasu  
*Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* I-VIII, Tokyo: Sankibo Busshorin 1986-2009.  
ed. Lévi, Sylvain

[1907] : Asaṅga: *Mahāyāna-Sūtrāḷḡkāra*, Paris  
ed. Rhys-Davids

[1911] : *The Yamaka, being the sixth book of the Abhidhamma Piṭaka*, The Pāli Text Society  
ed. Vaidya, P.L.

[1960] : *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā : Haribhadraviracitayā Ālokākhavyākhyayā sagutā*,

Darbhanga

<二次文献>

浅井真理

[1996]:「インド古典修辞学における押韻 (yamaka) について」『東海佛教』第 41 号, 東海印度学仏教学会

梅田愛子 (Umeda Aiko)

[2022]:『『維摩経』のパラドックスとその構造』『佛教學』63, 山喜房佛書林

大鹿実秋

[1988]:「維摩経における菩薩思想」,『維摩経の研究』, 平楽寺書店

梶山雄一

[2001]:『大乘仏典 2 八千頌般若経 I』, 中央公論新社

勝崎裕彦・小峰弥彦・下田正弘・渡辺章悟

[1997]:『大乘経典解説辞典』, 北辰堂

兒山敬一

[1958]:「無にして一の限定 —維摩経・入不二法門について—」『印度學佛教學研究』(7)1, pp.57-66

[1964]:「維摩経における入不二と菩薩行」『印度學佛教學研究』(12)1, pp.85-90

高橋尚夫・西野翠

[2011]:『梵文和訳維摩経』, 春秋社

菅沼晃

[2004]:『ドラマ維摩経全三幕』, 佼成出版社

長尾雅人 (・丹治昭義)

[2002]:『維摩経・首楞嚴三昧経』大乘仏典 7, 中央公論新社

西野翠

[2013]:「『維摩経』における不二法門について」『大正大学総合佛教研究所年報』(35), pp. 190-208

橋本芳契

[1966]:「大乘仏教における入不二(advaya-praveśa)の哲学—維摩経第九章の一考察—」『金沢大学法文学部論集』哲学編 13 1-34, 金沢大学法文学部

松村淳子

[2021]:『真理のことばの物語集—ダンマパダ・アッタヴァンナナー』第一巻, 国書刊行会

宮沢勘次

[2002]:「不二・即思想の展開」『印度學佛教學研究』(51)1, pp. 92-95

渡辺章悟

[2013a]:「『金剛般若経』の「即非の論理」」『財団法人松ケ岡文庫研究年報』(27), pp.43-53

[2013b]:「般若経の形成と展開」『シリーズ大乘仏教 第四巻 智慧／世界／ことば —大乘仏典 I』, 春秋社, pp.101-153

GOMEZ, Luis & HARRISON, Paul

[2022] : *The Teaching of Vimalakīrti*, Mangalam Press

GEROW, Edwin

[1971] *A Glossary of Indian Figures of Speech*, Mouton

LAMOTTE, Étienne

[1962] : *L'Enseignement de Vimalakīrti*, Louvain